様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年４月１日現在

機関番号：１３３０１
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2009～2011
課題番号：21520740
研究課題名（和文）ビザンツ皇帝権と霊性

研究課題名（英文）Byzantine Emperorship and Spirituality

研究代表者
根津　由喜夫（Nezu Yukio）
金沢大学・歴史言語文化学系・教授
研究者番号：50202247

研究成果の概要（和文）：本研究は、ビザンツ皇帝の帯びる霊性的権威の実像を解明することを目標にしている。11－12 世紀における帝都コンスタンティノープルをひとつの神聖空間として俯瞰した上で、そこで行動し、独特な政治文化が醸成されるのに貢献した皇帝以下のビザンツ人たちの行動形態を、極力、同時代の価値観、思考様式に基づいて解き明かしてゆくことを目指している。さらに、時の経過と共にそれらの現象がたどった変遷の過程も探求する。

研究成果の概要（英文）：This study is aimed to clarify the spiritual authority of Byzantine emperors. By regarding Constantinople, the imperial capital, as a kind of a sacred space, it will elucidate Byzantines' behavior patterns incubating a peculiar political culture from the contemporaneous values and thought patterns. In addition, we would like to analyze how thease representations would be changed with the course of time.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：西洋史
科研費の分科・細目：史学・西洋史
キーワード：ビザンツ、宗教と政治、皇帝権

１．研究開始当初の背景

今回の研究の着想に至った背景として、以下の３点が挙げられる。

(1) かつてビザンツ帝国の支配体制を語るとき、「皇帝教皇主義」という特異な用語を用いてそれを説明する風潮があった。今日では、この用語は、現実を必ずしも正確に反映するものではないとして使用が忌避される傾向が強いが、長い闘争の末に皇帝権と教皇権の分立が明確になった西欧世界と比べると、皇帝が総主教人事を専断し、ときの政治情勢に応じて教義論争に繰り返し介入するビザンツの状況は、西欧人には異常なものに見えたことは容易に想像できる。ビザンツ皇帝は、天上の神から地上の支配権を委ねられた唯一の支配者である、というのが帝国の不変の公式見解だったから、そこに一種の神権政治のイメージが付きまとったのは否定し

えないところだろう。以前に応募者は、中世西欧文学に登場するビザンツ人のイメージを探求したことがあるが、それらに登場するビザンツ皇帝が、しばしば天象気象を操る不気味な魔術的能力の保持者のように描きだされているのも、そうした西欧人の抱いたビザンツ皇帝のイメージが増幅したものだと考えると得心がいくように思われる。同時代の西欧人がビザンツ皇帝に抱いたそうしたイメージの正体を探りたい、という関心が本研究の出発点を成している。

(2) 以前に多様な民族集団が皇帝権の下で共生を実現したビザンツ社会の実態を考察した際、そうした雑多な集団を統合し、ひとつの国家としての求心性を維持するためには、こうした皇帝の帯びる、ある種の普遍的で超越的なカリスマが重要な武器になったことは看過できない事実であろう。ここからも、皇帝のもつカリスマ性への関心が生まれた。

(3) もうひとつ、今回の研究立案の重要な契機となった出来事に、2008 年に来日したアレクセイ・リドフ博士（モスクワ東方キリスト教文化研究所）の学術講演に接する機会を得たことがある。博士の説く Hierotopy という概念を、特定の社会集団が意図的に神聖な空間を創造、演出する作法と解するならば、その延長線上に、自らの周辺に神秘的な雰囲気をまとわせようとするビザンツ皇帝の政治作法を読み解くことが可能となるのではないだろうか。博士の研究は、聖像論争終結後の 10 世紀、マケドニア朝期のコンスタンティノープル、聖ソフィア聖堂の内部装飾に焦点を当てた、静態的な考察だったが、そうした手法を聖ソフィアから帝都コンスタンティノープル全体へと敷延し、対象とする時系列も、11 世紀から 12 世紀へと通時的に皇帝の自己演出の作法が変遷してゆく過程が追求できれば、当時のビザンツ政治文化の特質と変化を捉える上で、興味深い成果が得られるのではないか、という考えに思い至ったのである。

２．研究の目的

今回の研究において取り組むべき最大の課題は、11－12 世紀におけるビザンツ皇帝権が帯びた霊的権威の実像を究明することである。そのために取り組むべき作業は、方法論上、以下の２つに大別できる。ひとつは、聖ソフィア聖堂の内部装飾と帝都コンスタンティノープルで展開された祭礼、ページェントに関する図像学的資料（現存するそれに加え、文献史料から得られる情報を含む）を渉猟し、分析を加えて当該時期の状況をできるだけ精確に復元してそこに込められた象徴性を読み解くこと、もうひとつは、文献史料から、皇帝が関与した宗教儀礼や、彼が身近に侍らせた宗教人（隠者、修道士など）の実態を究明し、皇帝権力と宗教的イデオロロギーの結合の諸相を浮き彫りにすることである。前者によって、当該時期の聖ソフィアとコンスタンティノープルを舞台に繰り広げられた、この地を神聖な空間として演出しようとした壮大な戦略が浮かび上がる一方で、後者によって、そうした舞台の上でそれぞれ重要な役回りを担って行動する皇帝以下、一般民衆に至るまでのコンスタンティノープルの住民たちのダイナミックな動きを動態的に把握することができるのではないだろうか。そこでは、自らの正統性を高めるために、敬虔なる君主としてのイメージを振りまこうとして熱心に行動する皇帝側と、それを受け止め、状況に応じてそれに変幻自在な反応を示す移り気な首都民衆との間に切り結ばれた緊張感あふれる相互交渉の軌跡が跡付けられることになる。換言すれば、今回の研究は、コンスタンティノープルをひとつの神聖空間として俯瞰した上で、その上で行動し、独特な政治文化が醸成されるのに貢献した皇帝以下のビザンツ人たちの行動形態を、極力、同時代の価値観、思考様式に基づいて解き明かすことを目指しているのである。

３．研究の方法

今回の研究においては、ビザンツ帝国において皇帝の正統性を最終的に保障する神意の存在が、いかにして同時代人に認識されたかを検証することを計画している。皇帝が神意に沿っていることをアピールするには、聖ソフィアに体現される公的教会の空間でそれを発現する方法と、公的な教会組織の外にあって、直接、神と交信する能力を持つと信じられていた隠修士などの「聖者」のカリスマと結びつく、という２つの回路が存在した。本研究では、２つの回路それぞれの機能と相互関係を検証し、それがビザンツの政治的風土の中にどのように位置づけることができ

るかを解明したいと考えている。具体的には、11－12 世紀においてビザンツ皇帝の霊性を称揚する装置に関して、とくに図像学資料を中心に分析、検討を加える予定である。換言すれば、これは、この時期の皇帝権力が自らの権威をいかに視覚的に表現し、それを内外にアピールしようとしたのかを究明する試みである。考察の軸になるのは、コンスタンティノープル（現イスタンブール）の聖ソフィア聖堂南階上廊の皇帝肖像モザイクなどである。ただし、聖ソフィア聖堂内部に現存するこの時期の作例はごく限られているため、聖堂内部の装飾の全体像を復元するためには、それらを目撃し、記録に残した同時代の記述史料を博捜する必要がある。これに関しては、西欧から聖地を訪ねる途中にコンスタンティノープルを訪れた巡礼の報告や教会の内部装飾に言及したビザンツ文人の修辞作品など複数の史料の存在が現時点で確認されており、それらから得られた知見を相互に照合することが有用であろう。

また、ギリシア・エーゲ海地域の教会・修道院のモザイクやフレスコ壁画などの実地調査を行いたい。ビザンツ中期の見事なモザイクが現存するギリシア、ボイオティア地方のホシオス・ルカス修道院やキオス島のネア・モニ修道院は、当時の皇帝の手厚い保護と後援の下で施設の造営がなされたことが近年、解明されつつある。その結果、これらの修道院の内部装飾には、後援した皇帝の政治的なメッセージが隠されているという見方があり、それを読み解こうという試みもすでに現れている。この点では、とりわけ、皇帝コンスタンティノス９世モノマコスがその造営を全面的に後援したネア・モニ修道院の事例が重要となろう。コンスタンティノス９世帝に関しては、首都にマンガナの聖ゲオルギオス修道院複合体（現存せず）を造営し、聖ソフィアには自己の肖像モザイクを残すなど、自己の権力の正統化を図るため、宗教的な権威を積極的に利用したふしがある。ネア・モニ修道院の内部装飾についても、首都から派遣された職人集団の手で、皇帝の政治的プログラムに沿った意匠が盛り込まれた可能性が高い。この点は、現地でモザイクを詳細に観察して綿密な調査を行いたいと考えている。

次に取り組むべきは、皇帝（および皇后、皇族など）と、公的な教会組織の外部に立つ隠者・隠修士との関係を究明することである。ビザンツの史書を読んでいると、皇帝以下の支配エリートが、辺鄙な場所に庵を結ぶ隠者の許を訪れて助言をあおぐ場面にしばしば遭遇する。歴代の皇帝は、日常的な助言者として身辺に隠者や修道士をおく場合も多く、10 世紀に西欧での皇帝権再確立を図ったドイツ、オットー朝の君主が、あたかもそれが理想の皇帝を演じるための必須の道具立てであるかのごとく、こうした風習を模倣したことも広く知られている。また、ビザンツでは、新たに権力を奪取して帝位に昇った人物が、そのことを事前に特定の隠者や修道士によって予言されていた、といった類の逸話も帝国の歴史全体を通して頻出する。そうした予言が実現した後、皇帝は、件の隠者・修道士への謝意を示すために、多大な経費を投入して大規模な修道院を造営することが、しばしば目にされた光景だった。このように、公的な教会制度を介さず、直接的に神意を察知する能力を有すると考えられた隠者たちと歴代皇帝たちの接触・交流の実態を解明し、そのことが為政者の民心掌握にいかに貢献したのかを、具体的な史料分析（対象は歴史叙述と聖者伝が中心となる）を通じて考究する必要がある。

４．研究成果

11－12 世紀においてビザンツ皇帝の霊性を称揚する装置に関して、とくに図像学資料を中心に分析、検討を加えた。具体的な考察の対象となったのは、コンスタンティノープル（現イスタンブール）の聖ソフィア聖堂とコーラ修道院内部のモザイクおよびフレスコなどであり、イスタンブール考古学博物館に収蔵された彫刻作品もあわせて調査を行った。そのため、夏期に欧州に出張し、上記の調査を行った。その際には、あわせて、12 世紀に多くの教会施設が建立されたキプロスや、コムネノス朝の皇族が建立した修道院の遺構の残るギリシア東部フェライにも足を伸ばし、それぞれの地域権力が残した図像学的な素材（教会や修道院の壁画、奉献者としての君主像など）の収集に努めた。フェライのコスモソーテイラ教会では、壁画の軍事聖者像が同時代の皇帝一族の似姿として描写される貴重な作例を調査することができた。それらを、コンスタンティノープルの諸教会の事例と比較すれば、ビザンツ全般に適

用できる君主のイデオロギーの一般的特質や地域における、そこからの逸脱や変化を感知しうる可能性があると考えられるのである。首都の聖ソフィア聖堂の内部装飾に関しては、「外玄関廊の聖母子と 2 人の皇帝」のモザイク、内玄関廊正面入り口上部の「跪拝する皇帝」のモザイク、南階上廊の 2 組の皇帝夫妻肖像モザイクなどを検証し、そこから、コンスタンティノープルの守護聖者となった聖母マリアへの崇拝や、大天使ミカエルが聖ソフィア聖堂の守護者となる顛末を語る伝承、それぞれのモザイクに込められた皇帝たちの思いなどを考察した。

一連の考察の成果は、河出書房新社から刊行された『図説　ビザンツ帝国』として社会に還元することができた。

他方、首都のページェントや皇帝側近の隠者・隠修士との関係については、資料収集に手間取り、現時点では十分な成果を得られていない。この点は、今後、研究を継続させるなかで一定の結論に到達できるように努めたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

①根津由喜夫「ビザンツ貴族反乱の東と西—11 世紀中葉の事例から—」、『金沢大学歴史言語文化学系論集　史学・考古学篇』
2 号、2010 年 3 月、101-142 頁
（査読なし）

〔学会発表〕（計１件）

①根津由喜夫「11 世紀コンスタンティノープルの都市騒乱—皇帝改廃劇のシナリオ—」日本西洋史学会第 59 回大会　小シンポジウム、2009 年 6 月 14 日、専修大学（東京都）

〔図書〕（計２件）

①根津由喜夫『ビザンツ貴族と皇帝政権—コムネノス朝支配体制の成立過程—』、世界思想社、2012 年、528 頁
②根津由喜夫『図説　ビザンツ帝国　—刻印された千年の記憶—』、河出書房新社、2011 年、124 頁

６．研究組織
(1)研究代表者
根津　由喜夫（　Nezu Yukio　）
金沢大学・歴史言語文化学系・教授
研究者番号：50202247